

# 「大乘院文書」の継承・流出の軌跡

——國學院大學図書館蔵「福智院家文書」の理解の手掛かりに——  
付、同文書調査中間報告

河野昭昌  
松尾恒一

## 一、

本文書・國學院大學図書館蔵「福智院家文書」は、南都興福寺門跡大乘院の文書の一部である。具体的には、その「大乘院文書」と、興福寺三綱で大乘院坊官である福智院家の伝来文書との混合文書群である。

本文書の存在を最初に明らかにしたのは、院友で大和研究の牽引者永島福太郎先生で、それは平成三年（一九九一）に刊行された『国史大辞典』の「福智院文書」の項において「同家近世文書（日記類数十冊）は近年、国学院大学図書館の架蔵となった<sup>①</sup>」という、簡単な紹介である。これによってその存知して以来、筆者は一日も早い公開を待ち望んでいた。期せずして院友ではない筆者に、その公開準備作業の一端に携さわる機会を与えて頂いたことは、欣幸の至りと共に責任の重さを痛感している。

本文書の性格・位置付けを知るには、少なくとも現在の「興福寺文書」のあり様を存知しておく必要がある。それには、同じく永島先生の「春日社興福寺文書<sup>②</sup>」（一九七六年）が適当である。これは、興福寺の古文書・古記録が明治維新の廃仏毀釈に際して少なからず流出して、現在どこに架蔵されていて、どのような文書・記録類であるかを適格に叙述している。言うまでもなく、興福寺は大枠として一乗院と大乘院の二大門跡によって運営・管理されてきたが、この一方の大乘院の文書・記録である「大乘院文書」も、多方に流れ出て

いった。これに真正面から取り組んだのは、私の恩師荻野三七彦先生で、大著『お茶の水図書館蔵成簀堂文庫『大乘院文書』の解題的研究と目録』上・下（一九八五・八七年）で、現所蔵箇所の主文書と流出の過程を概括的に把握していて、本小文はこれを基底にして歩を進めている。

「興福寺文書」ないし「大乘院文書」がこのような状況にある中で、本文書は現在までのところ、「大乘院文書」の時間的には最後に巷間に流出した一群である。ということは、本文書の概容を知るには、「大乘院文書」継承および流出を系譜的に述べるのが一案となる。何故なら、この手法は、取りも直さず、「大乘院文書」の全体を概観することとなり、かつ文書の行き着き先を見ることがとなるからである。

ここで本小文を叙述するに際して、銘記していることを述べておきたい。それは、「大乘院文書」が時勢他により止むを得ず興福寺ないし大乘院およびその関係より流出することはあっても、今日我々が関知して閲覧できるのは、それに関わった関係箇所・関係者の並々ならぬ営為によつてはじめて可能であるということである。<sup>③</sup>よつて、感謝の念を以て、できる限り失礼の及ばぬ範囲内で叙述するつもりであるが、万一結果的に非礼な筆致になつている箇所があつたならば、深く心よりお詫びをする次第である。

さて、前述したような「大乘院文書」の系譜的な側面は、古文書学の泰斗上島有先生が、

猪熊信男による収集（「広島大学所蔵猪熊文書」中の「大乘院文書」、後述）の経過などが明らかになれば、「大乘院文書」の全容がよりはつきりすると思うが、おそらくそれは無理だと思う。<sup>④</sup>

と慨嘆しているように、「興福寺文書」は言うに及ばず、「大乘院文書」の全容を知ることが現在に至つては不可能に近いと思われる。ここでは敢えてそれに挑んで、「大乘院文書」が現在所蔵されている箇所へ如何にして継承・流出したかを可能な限り追跡することとしよう。

## 二、 明治二〇年（一八八七）前後の状況

このように「大乘院文書」ないし「興福寺文書」の全体像を把握するのが困難なのは、言うまでもなく前述したように、明治維新に際して興福寺が春日神社に参入し、興福寺を文字通り「伽藍堂」にしたことに起因する。この時、門跡以下は還俗し、門跡大乘院尚嘉は松

園と称し、大量の大乗院文書を坊官であった福智院庸徳（後、松園家執事）に委託したようである（後述）。この後の文書の管理、移動について、福智院家と親戚関係にあった春日杜家千鳥祐敬（一八六九—一九四四年）は次のように体験談を交えながら語っている。

主ナキ大乗院跡之地ニ独リ建チ残リタル八畳之蔵ニ納メラレタル古文書、明治十八年旧門跡之御里方九条家ヨリノ御請求ニ依リ元三綱職明治五年後□執事役タリシ福智〔院〕里美〔庸徳〕東京へ輸送スルニ付、長持買求メ方ヲ福智之伯父ヨリ依頼ヲ受ケ、祐敬時年十七歳奈良町之古道具屋ヲ巡リ長持長棹ヲ買い取ル、……送付ス。昭和十年東京帝国大学史料編纂所文学博士辻善之助氏ノ名義ニテ出版セラレタル大乗院日記ハ是即チ明治十八年奈良ヨリ送りシ七荷ノ長持ニ納メラレタル文書カ原書ナリ、

この回想からは、叔父庸徳より頼まれて、松園尚嘉の里方九条家の請求で大乗院の蔵の「大乗院寺社雑事記」を含んだ古文書を長持ち七箱に詰めて、明治一八年（一八三五）に東京へ輸送したこととなる。もう一人、庸徳の二男で同九年生れの松井五郎は次のように追想している。

幼年毎年反古ノ虫ヲ手伝ハサレシカ『座敷現今今西清兵衛氏所有昭和十一年特建書院』ニ充滿セリ、後令兄京都ニ持行キ処分セリ、松井によると福智院家（現、今西家）から兄憲徳が京都に移送したようである。ただ、後者は後述するように、明治二〇年代とも受け取れる。

ともあれ、千鳥の言う「古文書」とは、大半は、国立公文書館内閣文庫（以下、内閣文庫と略称）蔵の、

史料1 「貸出控目録 修史局」

一、安位寺殿御自記

八十二冊

一、尋尊大僧正記

二十一冊一巻

〔中略〕

計三百六十五冊六卷三十五通六枚

右致借用候

明治十九年十月十七日

修史局

従五位男爵松園尚嘉殿

と、東京大学史料編纂所蔵の、

史料2 「明治三十年 京都府奈良県 史料蒐集目録 六十二

上京区荒神町 松園尚嘉所蔵

松園氏ニハ書類凡卅箱長持三棹アリ、玉石混淆古文書ノ珍ラシキモノモ断簡トナリタルモノ少カラス  
四十五ノ箱

一、正安二年八月中島押領云々一札 一通

〔中略〕

二十一番箱〔応永頃旧記〕

〔中略〕

一、内山之記（建長正嘉ノ記事及ヒ条書等ノ控アリ）

〔後略〕<sup>⑧</sup>

と、そして松園裕家蔵の、

史料3 「収証」

一維摩詰所説

三卷

〔中略〕

一、多聞院長実房記〔「多聞院日記」〕

壹箱

〔中略〕

右ハ是迄御所有之處今般興福寺へ御寄附相成正ニ領掌致度、然ル上ハ永ク同寺ニ所有保存候也、

明治二十一年三月

興福会長 九條道孝

松園尚嘉殿<sup>⑨</sup>

からなっているものと推測される。結論から先にいうと、既に「大乘院文書」に精通の諸兄姉にあつては、右に掲げた文献名からお分りのことと思われるが、現在、史料1が内閣文庫、史料2が一部（「承元四年日記」へ国立東京博物館蔵他）を除いて財団法人石川文化

事業財団お茶の水図書館蔵成實堂文庫（以後、成實堂文庫と略称）、史料3が興福寺に所蔵されている。

これらを以下流出した時代順に説明していこう。史料1は、明治十九年に臨時修史局編修星野恒が「史料採訪」した時の「明治十九年大阪府 史料蒐集目録十六」<sup>(10)</sup>（東京大学史料編纂所蔵）の「松園尚嘉 安位寺殿御自記経覚筆裏書アリ 八十二冊」以下「計三百六十五冊六卷三十五通六枚」と同一である。これと同時に、一点が影写され、東京大学史料編纂所に「福智院文書」として架蔵されていて、『福智院家古文書』の「九九 春日社家文書（成巻）」<sup>(12)</sup>がこれに当たる。なお、明治一九（一八八六年）当時奈良町は大阪府に属していた。明治一九年段階では「借用」<sup>(13)</sup>であったものが、二年後には、内閣文庫蔵の「太政官文庫」の「古文書目録 購買之部 明治廿一年」に、

奈良大乘院古記録

五百六十四冊 六卷 三十五通 沢渡広孝ヨリ買入

購買代価金三百五十円 明治廿一年十一月三十日交収 会計局明治廿一年十一月三十日通知済<sup>(14)</sup>

と、記されているように、「内閣文庫（図書課所管）」<sup>(15)</sup>が購入している。前述したように、これが内閣文庫の「大乘院文書」<sup>(16)</sup>である。同文庫は、「大乘院古記録」群を整理するに当たって、「大乘院文書」という「カテゴリ」（範疇）を作り、いわゆる「パテント」（特許）を取ったことにより、以後古文書・古記録を総称して「大乘院文書」と呼称するようになったのである。<sup>(17)</sup>

なお、代金の使用法について興味ある記事を紹介しておこう。福智院から松園への同二年十一月一四日付の書簡で、代価が三百円より五〇円値上がりしたことを伝え、続けて、

付テハ右御旧記ハ全ク尋尊様<sup>永正五年五月二日死去ノ御方</sup>之御直記頗ル沢山今度御買上ケニ相成候、御記ハ右之御方之分十トモニ御座候、尤今度之

御用ニ屹度相成候段、先年星野〔恒〕も被申居候、右御金御落手之上ハ右之御方之法事被成爲遊候ハバ無此上結構成御事ニ□為ニ儘申上候也、

と、その一因を「尋尊大僧正記」その他一括の「大乘院寺社雑事記」に帰していて、殊に尋尊のそれは分量が多く、前掲の歴史編纂に有用である由なので、代価を受領した際は尋尊の「法事」を施行しては如何と、提案している。これは、『大乘院寺社雑事記』に関して星野のその重要性を逸早く認知した点、寺内の処し法において、その受容史に一頁を飾ろう。なお、実際に奈良の福智院家から東京へ移送されたのは千鳥の回想する同一八年よりも、上記史料より一九年から二二年一二月の間であったと推察される。この期間の最終段階の二一年八月一〇日から一四日にかけて宝物調査の図書頭兼宝物取調局長九鬼隆一・フエノロサ一行の下に、明治期の古典学者小杉楹邨が興

福寺に調査に向き、記録を残している。

八月十日 興福寺事務所二において同寺古文書旧記等取調

福智院庸徳紹介

解脱上人筆 因明ノ書 一卷

と書きはじめ、その翌日には、

八月十一日 松園尚嘉所蔵

類聚世要抄 古写 正月ヨリ十日に至 二十卷

外ニトチ本一二三四正月分副本アリ

時代順徳院帝比ノ「<sup>(コト)</sup>迄ノ寺家ノ年中行事ヲ始スベテ式ヲ類聚シツルモノナリ<sup>(20)</sup>

と記しはじめ、「興福寺文書」「大乘院文書」を学問的に調査し、目録を作成している。余談ながら、「類聚世要抄」(現、成實堂文庫蔵)の格的な説明に見られるごとくこれは、「大乘院文書」の学術的調査の嚆矢と見なして差支えあるまい。

次は史料3の文書群で、明治一〇年代になると、興福寺再興の動きが生じ、一八年に興福会(会長九条道孝)<sup>(21)</sup>が発足し、松園尚嘉、水谷川(旧一乗院)忠起は「主唱」に名を連ね、福智庸徳は「司計兼委員」の一人となっている。漸次同寺は整備され、これに合わせてか、松園は大乘院で所蔵していた文書・古記録の一部を、前述より約半年前に、興福寺に「寄附」<sup>(22)</sup>している。これらは、『興福寺典籍文書目録<sup>(23)</sup>』の構成文献の一部を占めている。

もうひとつの史料2の一群は、前掲したように「明治三〇年」には「上京区荒神町 松園尚嘉所蔵」<sup>(24)</sup>とある記載により、明治二一年より三〇年の間に前記の「大乘院文書」のかなりの部分の文書群が、京都府上京区荒神町の九条邸に移送されたことが推測される。とする、前掲の松井五郎の追想はこの一群の際の場合もあり得るのである。

京都への移送がどちらにせよ、松園は明治二二年に、一群は国家に売却し、一群は興福寺に寄付し、そして残りの群を福智院家に預けたのである。この処理法がどうであれ、結果的には消滅することなく残存したことは、後の南都研究はじめどれ程貢献を成したかにについては、いくら評価してもし過ぎることはあるまい。

### 三、大正一二年（一九二三）前後の状況

史料2の一群は、古書店主横尾勇之助が記した「文行堂座右記」に、

大乘院記録 二千余巻 復興第一ノ出物ナリ、鷹司邸内松園家ヨリ購入、野中完一氏ノ世話ナリ、之ヲ徳富蘇峯先生へ売レリ……大正十二年十二月廿九日ナリ、<sup>25</sup>

とあるように、大正一二年（一九二三）評論家・歴史家で近代日本の屈指の蒐集家蘇峰徳富猪一郎が購入するところとなったのである。これについて、蘇峰は、「所有欲」は「制限的にかつ常識的」であったが、「あまりに獲物」が良かったために一度だけ例外があったといい、それは東京大震災の年の暮、上野黒門町の文行堂において『大乘院文書』を発見したときである。そのときはわが国民新聞社の焼けてほとんど浮沈の際であつたが、しかし、この文書はその量といい質といい、好書家として見遁すべきものにあらざと見え、後先の思慮もなくこれを購求した。<sup>26</sup>

と、「大乘院文書」がそれであり、見識の高さと英断を以てこれを購入したのである。蘇峰は、「大乘院文書」を含む一大コレクション成篁堂文庫古文書のユニークな目録『成篁堂古文書目録』を、辻善之助（藤木邦彦・宝月圭吾等調査）に託して昭和十一年（一九三六）に刊行している。<sup>27</sup> 先の引用文の中で言明している経済的「浮沈」を救ったのが、主婦之友社社長石川武美である。これを契機に石川が蘇峰の知遇と信頼を得て、蘇峰の一大蒐集の古文書・古典籍の成篁堂文庫を昭和十六年（一九四一）に一括継承して、財団法人文化事業報国会（蘇峰評議員、現財団法人石川文化事業財団）を発足させた。その蔵書を「核とし、母体として」<sup>28</sup> 図書館構想を抱き、一二年にお茶の水図書館を開館させたのである。この財団が、成篁堂文庫の中から「大乘院文書」のみの目録を前述した荻野先生に依頼し、先生は「解題的研究」という独自の発想に依拠して、前述の「お茶の水図書館蔵 成篁堂文庫『大乘院文書』の解題的研究と目録」二冊を刊行した。

かくて、内藤の追想によって、「成篁堂古文書」のそれは、京都松園邸に所蔵されていたものであることは明かである。しかし、現実にはこれは残された一群の一部であつた。というのは、宮内省御用掛のかたわら古文書・古典籍を蒐集した猪熊信男が、「京都の川端荒神口上ル九条家砂川別邸に保管された。それ『文書記録類』を……九条家・松園家に乞い譲り受け」た「猪熊文書」<sup>29</sup>（恩頼堂文庫とも称す）の「大乘院文書」が存在しているからである。この文書は、猪熊と福尾猛市郎広島大学教授の「親交の絆」<sup>31</sup>により、広島大学に所蔵されることとなり、その大半は、松岡久人広島大学教授により「『広島大学所蔵』猪熊文書」全二冊で翻刻されている。

さらに、その存在がほとんど知られていない京都府立図書館から引き継がれた京都府立総合資料館蔵「大乘院文書」は、「松井」尚嘉が九条尚忠の二男であったことから、京都の川端荒神口上ルの九条家砂川別邸に保管された<sup>(32)</sup>。と旨の事を記しているのも、同じく砂川別邸より流出したものである。なお、同館蔵の一部には、「松園／尚嘉」(3.0×3.0 cm)という印影が見られる。

右のように明治三〇年(一八九七)以降、具体的には大正一二年(一九二三)以降、九条家砂川邸に保管されていた「大乘院文書」は、成簀堂、恩頼堂、京都府立図書館の三箇所流出したこととなる。各々の特徴であるが、成簀堂文庫は「類聚世要抄」等の中世の記録・古文書も多数存しているが、量の上では近世の日記をはじめ記録・文書が大半を占めているのに対して、恩頼堂は、中世から近世の「長者宣」等の見栄えのいい古文書、それに若干の莊園諸記録であり、京都府立総合資料館は、近世大乘院の財政文書を中心としているように見受けられる。

前後して申し訳ないが、ここで内閣文庫と興福寺への古文書・古記録の特徴を一言述べておく必要がある。前者は「大乘院寺社雑事記」、諸莊園図を含む「大乘院文書」をはじめとして歴史史料として最良のものが、後者は「因明論疎明燈抄」をはじめとする聖教類、「菩提院蔵俊画像」のような寺に不可欠のもの選別されているように察せられる。

以上から周知の内閣文庫、成簀堂文庫、恩頼堂文庫(「猪熊文書」)が単純に出所を同一にしているという認識、そして「三者への分割はかなり大雑把なものではなかったかと思われる<sup>(33)</sup>」という見解に代表されている認識に一定程度の疑義を挟まざるを得ない。

なお、福智院庸徳の文書管理に関する一挿話を示そう。早稲田大学図書館蔵の「荻野研究室収集文書」に数点含まれている「興福寺大乘院文書」の添紙<sup>(34)</sup>に、旧蔵者元興福寺「唐院修理奉行」中村堯円が明治一九年(一八八六)一月福智(院)庸徳より「尋尊御方之古文書」が「到来」したと認めているのは、庸徳の文書管理の一端を知らしめているようである。この辺りに、「文書なども坊官に委ねられることはなかったらしい<sup>(35)</sup>」という、推測が出てくるのであろうか。

#### 四、 福智院家・松園家継承文書と出所箇所不詳文書

上記の残された記録から見る限り「大乘院文書」は全て京都に移送されたように理解されるが、現実には奈良の福智院家にも残されて



いた一群があつたのである。それが、福智院家が大正一三年（一九二四）屋敷を今西家（前掲）に売却し、京都への転住に際して文書も移動している。その一部が山田重正の『古都陽炎』（一九八〇年）、それに花園大学福智院家文書研究会の編集による『福智院家文書』仮目録<sup>37</sup>、前掲書『福智院家古文書』である。この文書群は、福智（院）庸徳が松園家より委託されたものと、福智院家伝来のものから成っている。その後者の代表的なものは前掲『仮目録』三四〇「古文書類・家譜書類袋入」<sup>38</sup>である。この文書群は、現所蔵者の山田伸彦氏（京都市在住）が筆者の質問に答えて述べられるように、

昭和四五年頃庸徳の孫徳子さんが東京に移住する時、徳子さんが一部お持ちになった他、大半は庸徳の外孫で、徳子さんの従兄弟である父重正〔前掲〕に譲られた。

と、福智院家より山田家に委譲されたものである。この転住前後に大乘院伝来の近世文書（若干の中世文書を含む）と、福智院家伝来の近世家産文書が巷間に流れ、國學院大學図書館に蔵されるに至った。これが、本文書國學院大學図書館蔵「福智院家文書」である。と判断できるのは山田家蔵「福智院家文書」には、庸徳による朱筆の端裏書が見られる文書が多数あるが、國學院大学のそれにも同じ朱筆が見られることよってである。さらに、これを今回確認することができた。それは、本文書の目録作業中に、受入れ関係書類が収められている封筒を調査した時、某書店よりの同四八年七月一二日付の「学部受入控」が存していたからである。この日時は、先の山田氏の回想談の昭和四五年（一九七〇）頃と、時間的には符合するものであるからである。なお、この購入には西田長男教授の力添えが大きかった由である。

そして、同じく山田氏の追想にある「令孫徳子さんが一部お持ちになった」とされていた文書は、神奈川県在住の中村京子氏（前述、文部省科研費「興福寺旧蔵史料の所在調査・目録作成及び研究」会へ代表者上島享氏）により調査中、筆者も末席）が所蔵している。

さらに、松園家が代々所持していたものに、いわゆる「大乘院文書」が若干含まれているようである。それは、前掲した『菊と牡丹』<sup>39</sup>に写真掲載されており、現在東京都在住の松園裕氏が受け継いでいる。

以上の継承・流出の軌跡がある程度判明する文書群の他に、その系譜が不詳の「大乘院文書」を蒐収している箇所が現在までの調査で二箇所ある。そのひとつは、『大和上代寺院志』（一九三三年）の著者で「大和史料蒐集家」<sup>40</sup>と知られている保井芳太郎が長年に亘って蒐集したもので、これには近世の大乘院日記を含んでいる。現在天理大学付属天理図書館に所蔵され、「旧保井文庫近世仮目録」中の「春日・興福寺文書」（未刊行）で整理されている。実はこれは、「二条憲乗日記」他の「一乗院文書」が主体である。それに、『保井家古文

書目録<sup>41</sup>」にも若干の大乘院中世文書が鰯刻されている（現、天理大学付属天理図書館蔵、大半は旧一乗院門跡坊官二条家文書）。他のひとつは実業家根津嘉一郎（蘇峰の前掲の国民新聞社を「蹴つて蹴つて蹴りつけて」<sup>42</sup>買収）の蒐集した成巻文書（八巻）があり、これは鎌倉時代から江戸時代前期の文書で、「室町時代名家の筆跡が多数見られる」<sup>43</sup>とくに特徴がある。根津美術館に現蔵され、田中稔国立歴史民族博物館教授によって「史料紹介 根津美術館所蔵文書（下）」<sup>44</sup>に目録が収められている。

## 五、

如上、南都興福寺の「大乘院文書」の継承・流出の軌跡は、複雑な様相を呈しているを言わざるを得まい。しかし、それらをたどることができるといふことは、取りも直さず現在我々が幸いにも実見することが可能であるということである。その点を認識した上で、権門寺社の中でも数少ない、文書の流失がほとんど見られない高野山、流出しながらも豊富な文書を保持している東大寺等とは異なるあり様と見なさざるを得まい。さらに、周知の「東大寺文書」の宮内庁管理「正倉院文書」、法隆寺の国立東京博物館蔵「法隆寺献納宝物」とは異なることは指摘するまでもなからう。

とすると、現在の「大乘院文書」のあり様は、まさに日本近代寺院史はもとより、前述した文化財の上においても、特殊な様態を示している見なさざる得ない。換言すると、文化史上特異な航跡を残していると察して差支えなからう。これは、興福寺住職多川俊映師が、本寺が前述した明治前期に「公園の中の寺」として復興を運命づけられた故に、現在の「寺観の整備は、明治以降の興福寺が抱えるものともむずかしい問題といつてよい」<sup>45</sup>と、吐露している懸案と軌を一にするものであることに多言は要すまい。

## 註

- (1) 国史大辞典編集委員会編、一二巻。
- (2) 『國學院雑誌』八〇巻一一号、一九七六年八月。他に、「興福寺の史料」(高橋隆三先生喜寿記念論集刊行会編)、『高橋隆三先生喜寿記念論集』古記録の研究(一九七〇年)がある。
- (3) かかる観点に依拠すると、日本の近代における古文書群の系譜および古文書・古典籍の蒐集は、文化的営為に位置付けられないものか、と推論している。というのは、近年論議を呼んでいて、「日本の近代史を考える上で、文化財問題は極めて重要な意義を持っている。」(鈴木良「近代日本文化財問題の課題について」『歴史評論』一九九八年一月、五七三号、二頁)と提起されている文化財問題に関わる項目と、考察するからである。しかし、このような問題設定は現在までのところ、例えば岸本覚・山辺昌彦編「近代日本文化財問題研究目録」(前同書)において含まれていないこと等から、見受けられないように察せられる。このような状況にある中、去年(一九八七)国立歴史民俗博物館(編)より「収集家一〇〇年の軌跡―水木コレクションのすべて―」が刊行されたことは特筆に値しよう。本小文が以上の問題関心に沿って、文化財の継承・蒐集という視座をも加味していることを付記しておく。
- (4) 「書評紹介」お茶の水図書館蔵  
成實堂文庫「大乘院文書」の解題的研究と目録」上・下、「古文書研究」三〇号、一九八九年、一二〇頁。
- (5) 「大乘院志」、奈良県立奈良図書館蔵「藤田文庫」。
- (6) 同右。
- (7) 松園裕「牡丹と菊―撰家門跡家より見た興福寺史―」一、一九九四年、二二―二三頁。確認のため内閣文庫に閲覧を希望し、図書専門官長澤孝三先生にご尽力頂くが、「再整理につき」叶わなかった。今後の宿題とする。
- (8) 東京大学史料編纂所蔵
- (9) 前掲註(7)、一二三頁。
- (10) 東京大学史料編纂所蔵
- (11) 同右。
- (12) 花園大学福智院家文書研究会編、一九七九年。この一巻は、内閣文庫蔵「唐院古文書写」に見られる。実は、上の「唐院文書」は「春日大社文書」(重要文化財)の中核をなしている。ならば、これは「春日大社文書」に連なる文書ということになる。系譜上「興福寺文書」の範疇に入るので、これ以上の叙述は別の機会に譲ることとしよう。
- (13) 前掲註(7)。

- (14) 内閣文庫蔵、前掲書「お茶の水図書館蔵 成實堂文庫」『大乘院文書』の解題的研究と目録」上、七五頁。これは「新収原簿」（国立公文書館編『内閣文庫増補版』一九八六年、三〇頁）に該当するものと推測され、確認の閲覧を希望するが、前掲（注7）と同様に終わった。
- (15) 同右『内閣文庫百年史』九頁。
- (16) 国立公文書館内閣文庫『改訂内閣文庫国書分類目録』上（一九七四年）に大半収載されている。
- (17) 永島福太郎先生よりご教授。前掲註（2）には、当時の内閣文庫では「広義と狭義との二つが示されていた」（二〇九頁）ことを伝えている。
- (18) 前掲註（7）、一三三頁。
- (19) 竹居明男氏の「明治二十一年近畿地方古美術調査の記録」（『博物館学年報』一九八一―八五年、一三一―一七号）によると、日程上は符合するが、一員に見られない。この点に関しては、今後さらに調査していくこととする。
- (20) 早稲田大学図書館蔵「荻野三七彦旧蔵資料」中の「関西地方古書画古器物縦覧調査記録」（全四冊、小杉楢邨撰）一。この時、東大寺、法隆寺他の関西各地を巡覧しており、彼の「徴古雑抄」の材料となっている。興福寺に関しては、「福智院家文書研究会」（主宰上島亨京都府立大学助教授、後述）にて一九九八年二月一六日口頭発表した。資料的価値が存するように推察されるので、改めて紹介したい。
- (21) 天理大学付属図書館蔵「〔南都興福寺／伽藍保存〕興福会職員姓名録』発行年不記。
- (22) 前掲註（9）。
- (23) 奈良国立文化財研究所編、一・二巻、一九八六・九六年。
- (24) 東京大学史料編纂所蔵。
- (25) 長沢規矩也編『日本書誌学大系 一六 本屋のはなし』一九八一年、二九三頁。横尾が「鷹司家」と記しているのは、同家が九条家を含ませているからであろう。
- (26) 「読書九十年」「読書法」一九七五年、九九頁。
- (27) 古典籍は既に、川瀬一馬先生と長沢規矩也氏に託して『成實堂善本目録』を一九三三年（昭和七）に刊行している。『成實堂古文書目録』がユニークなのは、前書に倣った故と推測される。
- (28) 財団法人石川文化事業財団編『四十年の歩み』一九八一年、八頁。なお、蘇峰と石川の関係は、「徳富蘇峰と『大乘院文書』と石川武美」と題して別稿を予定している。

- (29) 松岡久人編『広島大学所蔵猪熊文書』一、一九八二年、解説五五頁。
- (30) この文庫の一部が、四天王寺国際仏教大学図書館に蔵されている。同図書館編『恩頼堂文庫目録』(一一三)と題して、『紀要』四天王寺国際仏教大学文学部、一九六九年六月―七〇年十二月、一〇―一二号に掲載されている。
- (31) 『日本歴史』一九六二年九月、一八四号。
- (32) 京都府立総合資料館編『京都府立総合資料館所蔵文書解題』一九九五年、二三頁。
- (33) 前掲註(29)二、解説二四頁。
- (34) 早稲田大学図書館編『早稲田大学所蔵文書』上、一九七八年、二六一頁。
- (35) 奈良六大寺大観刊行会編『興福寺』一九六九年、解説二四頁。
- (36) 前掲註(2)、一二二頁。
- (37) 『花園大学研究紀要』六号、一九七五年。
- (38) 同右。
- (39) 前掲註(7)。
- (40) 高田十郎『奈良百題』一九四三年、二〇二頁。
- (41) 保田芳太郎編輯・永島福太郎編纂、一九三五年。
- (42) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』一九三五年、五二二頁。
- (43) 『古文書研究』三〇号、一九八九年三月、七七頁。
- (44) 同右。
- (45) 『奈良興福寺』一九九〇年、八〇・八二頁。

(付記) いつもながら、永島福太郎先生には種々ご教授賜わり、奈良県立奈良図書館郷土資料室長山上豊氏にはご教示頂いた。資料閲覧に際しては、石川文化事業財団お茶の水図書館はじめ、興福寺(小西正文先生)、国立公文書館内閣文庫、天理大学付属図書館、東京大学史料編纂所、広島大学文学部国史学教室、奈良県立図書館郷土資料室、早稲田大学図書館特別資料室、そして聞取りに際しては山田伸彦氏に大変お世話になった。ここに記して謝意を表する。

(一九九九・一一・二九)

〔河野〕

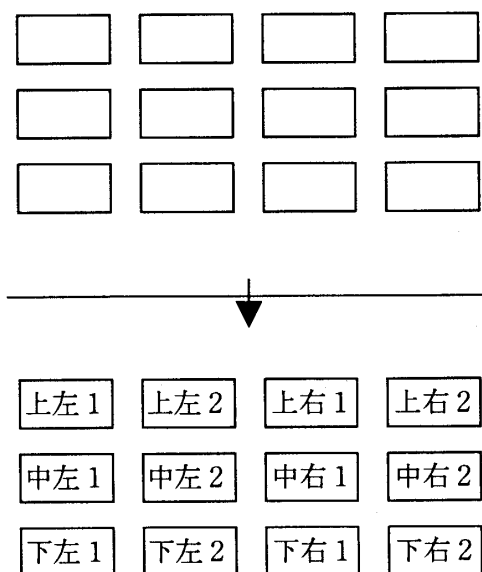
## 付、調査中間報告

如上、記したように現在、本学図書館蔵の「福智院家文書」の公開のための目録作製を目的とした調査が進行している。調査にあたっているのは、本学文学部の松尾恒一・日本文化研究所共同研究員の河野昭昌、及び林文子（東京女子大学）を中心とする作業グループで、これに黒田智・涌井美夏の両氏に協力をいただいている。

元石川文化事業財団お茶の水図書館嘱託であり、同館蔵成實堂文庫の「大乘院文書」の整理にあたっていた河野に、以前より本学の「福智院家文書」の整理を依頼してはとの提案が図書館内にあったが、本学専任教員の松尾が河野と共同で作業を行う体制が整い、平成十年九月に調査の開始となった。ここにその進捗について報告し、大方の助言を望むものである。

まず、本学図書館における架蔵状況であるが、縦四一纏、横五一纏、高九纏の文書整理の函、十二函に約三五〇冊の簿冊類の記録類、及び約九五〇点の文書が収められている。文書九五〇点とは、一通を一点と数え、また数通の文書が包紙に包まれて収められているものについてはこれを一点と数えて、合算した点数であり、包紙内の文書数について未調査である。また、簿冊類の中、主として日次記内に関連の文書が挟入されている場合があり、これらを合算すると、一千通を超える文書が存することが予想される。

これらの史料が、図書館貴重書収蔵庫内に文書整理の函に収められて収蔵されているわけであるが、十二の函には特に函番号等は付されず、左上の図の如くに棚に配架されている。



当初、この配置が、本学図書館に收藏される以前の收藏の状況に基づく、あるいは、これがある程度反映している可能性が考えられたので、函の配置が復元できるよう右下の図のように「上左1」より「下右2」まで仮の函番号を付して作業を開始した。

しかしながら、ごく大づかみに言えば、函により簿冊と文書とを区別して収め、また簿冊類に関しては形態、及び外題によりごく大まかに整理されているものの、現在までの作業において実感されるところを述べれば、この整理は、昭和四十八年の購入時に整理函に収めるにあたって仮に行われたものであり、かつ、現況より購入以前の收藏状況を推定することは極めて困難であると思われる。

さて、資料の整理にあたっては内容の把握が比較的容易な簿冊類より着手した。

基本的には一点一冊の資料であるが、次の項目について一点ずつのデータを調査、記録化していった。

- 内題・外題
- 筆者・編者
- 写刊年代
- 装丁・形態、法量（縦横寸法）
- 頁数、紙数
- 本文料紙
- 朱点・合点・注・差図・図像
- 奥書・識語

現在、簿冊類約三五〇冊について一次調査が終了し、今後記録データの確認・修正を主とする二次調査に入る予定である。その大半は袋綴装の半紙本（縦約二四糎、横約一七糎）、もしくは美濃本（縦約三〇糎、横約二三糎）であるが、内容上は、現在のところ、次のように分類する案が、我々の間で有力である。該当の資料のいくつかを合わせて示せば次のごとくである。

① 日記	「日記」「塵芥抄」「大御所御在京中之記」「関東御使之記」等
② 財政・経営	「家領収納帳」「当家領年貢収納帳」「御毛見帳」「綿方高畝御物成帳」等
③ 組織	「大乘院門跡坊官福智院家譜」「親族書」「寺務職関係文書書拔」等

以下、簡単に各分類について説明したい。

本学図書館蔵の「福智院家文書」は主として近世期の史料群で、この中、冊数、及び内容より、根幹をなすと認められるのが、①「日次記」である。代々の福智院家の当主が門跡大乘院家坊官として仕える公務の日誌として認められたもので、②以下の事柄についての日々の記録である。表紙には、「日次記」あるいは「日記」と記され、年号とともに自署、年齢が記されるものが多く、その公的な性格を窺うことができる。年中行事として行われた興福寺新能や春日若宮御祭等、芸能・祭礼文化に関わる記事も少なくない。なお、京都への上洛記や、江戸への参向記もここに含めた。

②「財政・経営」は、福智院家の家領や、興福寺・大乘院領たる村落の年貢収納や金銭出納関係、綿高についての記録。

③「組織」は、大乘院門跡の坊官を勤めた代々の福智院家当主の系譜のほか、興福寺の寺誌等もここに含めて考えている。

④「法会」は、奈良時代以来続く興福寺最大の年中行事であり勅会でもあった維摩会の諸記録がもつとも多く収められる。福智院家は、近世期には代々、法会の進行等を司る威儀師役に勤仕するのが慣例であったようで、その次第記録等が多く収められる。

その他、大乘院門跡歴代の得度記や東大寺戒壇院での受戒記録である。なお、この一類には、現実の法会で携行したと思われる中世後期の粘蝶装の柃形本数点が含まれる。

⑤「大行事」は、春日若宮の拝殿巫女の補任等に関わる大行事職を勤めた際の記録類で、以下の「堂童子・仕丁」や「春日社」とも関連の深い一類。

⑥「堂童子・仕丁」は、興福寺の仏会や春日社の祭礼において雑役に奉仕した堂童子・仕丁と称する役人に関する記録で、主に近世期の家職

④ 法会	「維摩會日記」「維摩會威儀師役之記下書」「東大寺受戒會記」「東大寺法華會記下書」「得度方記」等
⑤ 大行事	「大行事方之記」等
⑥ 堂童子・仕丁	「堂童子職之記」「堂童子闕職之記」「諸堂堂童子新入番入ノ記」「仕丁役附并年齢」「仕丁職之記」等
⑦ 春日社	「春日若宮御神事之日記」「春日社若宮拝殿巫女転任并神楽男座上記」「春日造営米之儀二付日次」「御社御造営方覚」等
⑧ その他	「相盃酌之書」「御里様御弘メ御祝儀物覚」等



としての、その補任に関わる記録である。

⑦「春日社」は、興福寺が主催する鎮守社たる春日若宮社の祭礼や春日社の造営、このほか、神楽に奉仕する若宮拝殿巫女や神楽男に関わる記録。

⑧「その他」は、婚礼における杯事の次第や祝儀目録、また、福智院の当主が折々に認めた漢詩や和歌等である。

以上、現在の分類試案に基づいてごく簡単に、資料の内容を紹介したが、近い将来行うであろう資料請求番号の決定の際に、本分類を活かすかどうか、あるいは、たとえば、単に年次順に配列して番号を決定すべきか、等、その方針については未だ検討中である。

この約十余年、日本史を中心に寺院史研究という分野が確立されつつある中で、中期の興福寺研究の進展はめざましいものがある。これにくらべると近現代につながる時代としてより重要な時代であるという認識の下に、近世期の研究は近年ようやく目が向けられてきたといった状況であると思われる。中期程に比するのは躊躇されるものの、近世期にあつて、大和国の政治・経済・文化に対して依然として無視し得ない影響力を有していた興福寺の姿が、今後の研究において浮かび上がってくるものと思われるが、本學図書館蔵の「福智院家文書」が、内閣文庫、成實堂文庫（お茶の水図書館）、「猪熊文書」（広島大学）や保井文庫（天理大学図書館）の「大乘院文書」とともに重要な資料群に位置付けられることを願う次第である。

〔松尾・河野〕